

# 比較文化会報

Dec. 1999 No.20

本部事務局 青森県弘前市稔町13-1  
弘前学院大学英米文学佐藤研究室  
電話 (0172) 34-5211 内線216

発行者 芳賀 馨  
編集者 楠 純 一

## 二千年の全国大会に向けて

関東支部長 太田敬雄

一、お詫びとお願い  
「新しい世紀の始まりだ。」「いや、今世紀の最後の年だ。」などと言われていますが、その厳密な線引きはともかく、来る二千年は新しい時代への区切りの年になることは確かです。

この新しい区切りの年に、関東支部が主幹で全国大会が開かれることに少なからず緊張を覚え準備を始めておりました。今年の六月の大会でも、そのつもりで御案内させて頂きました。

しかし、時として運命の女神は意地の悪い悪戯をするもので、夏以降状況は一変し予定した大学での開催が危ぶまれる状況が出て参りました。大学に直接問い合わせた訳ではありませんが、諸々の要素を総合して検討致しました結果二千年六月の開催は困難であるとの判断をせざるを得なくなりました。

関東支部長としての、私の独断で会長に相談し、臨時理事会を経て、来年度の大会は関東支部主幹で、東北学院大学泉キャンパスに会場を移して実施することになりました。

予定しておりました大学の学内事情にも関わることで、詳細は伏せていただきますが、会員皆様のご理解をたまわりたいと存じ、併せて急な変更のお詫びを申し上げます。

来年は、日本比較文化学会会長の東北学院大学の教授としての最後の年となります。芳賀先生は日本比較文化学会の前身でありました東北比較文化学会の設立

を提案され、企画、実施の中心となつてこられました。一九七九年の第一回の設立に向けての非公式の会合の参加者は、芳賀先生を含めて六名であったことが、『比較文化学論叢』の巻末に記されています。また「比較文化学」が今日のように注目されていない中で、学際的な学会とするためにこの名称を提案されたのも芳賀先生であったと記憶しています。

学際的であると共に、この学会は研究発表に、あるいは論文発表にと、学会員が「活用する」学会とすべきであるとの芳賀先生の御意見により、まだ会員数もわずかだった第一回の大会ですでに五名の会員の研究発表がありました。

この伝統は今日の日本比較文化学会にも引き継がれ、学会員数、大会出席者数との比で見ますと他の学会では想像もできないほど大勢の会員が発表してこられました。発表会場にはその部屋で発表する発表者と司会者しかいないという状況がしばしば見られるほどで、大会に「参加するなら発表する」という学会になっていますのも、芳賀先生の方針のお陰だと思えます。

二千年という区切りの年、また芳賀会長の東北学院大学での最後の年の大会を迎えるにあたり、先生のこれからの御活躍を祈念する盛大な大会にしたいと存じます。御協力と御参加をお願いします。

### 二、東北学院大学へのお誘い

仙台には「人間が人間らしく生きられ

る町」という印象が私にはあります。私の住む群馬の小さな町から見ますと、大都会なのですが、仙台駅周辺に展開する広々とした地形、広い道路、そして緑豊かな町並みは「都会」と言う言葉の持つイメージを払拭してくれます。

東北学院大学泉キャンパスに行くには、仙台駅から地下鉄に乗り、終点の泉中央駅まで、金額にして二九〇円、時間にして一分ほどです。その地下鉄と乗客までもがゆったりとしているように感じさせられます。

泉中央で駅を降りてバスあるいはタクシーで泉キャンパスに向くと、仙台駅周辺では見られなかった丘陵地帯がすぐ近くに見え始めます。道は仙台駅周辺とは逆に細く曲がりくねり、渋滞も頻繁に起こりますが、それもつかの間。国道四号線を超えると、なだらかな上り坂を車は進み、間もなく東北学院大学の泉キャンパスに到着します。

キャンパスには木々の緑と丘陵の斜面を生かして、幾つかの建物が整然と並べられています。訪れる度に研究書に没頭し思索に耽るには絶好の環境だと思わせられるキャンパスです。

来年の六月このキャンパスで皆様とお目にかかり、研究に、親睦に有意義な時間を共に過ごしたいと祈念しております。

# 第二十一回大会を終えて

九州支部長 梅田和郎

九州支部が担当いたしました第二十一回比較文化学会は久留米大学御井キャンパスにおいて六月十二日に開催されました。

## 《第二十一回大会総会報告》

### 一 報告

#### 庶務報告

- (1) 『比較文化研究』発行について  
38、39、40、41、42号を発行。
- (2) 主な送付先  
国立国会図書館、HARVARD YENCHING LIBRARY、郵政省郵務局、論説資料保存会など。

- (3) 第十八期日本比較文化学会学術会議登録について  
この手続を完了。

#### 2 第二十二回大会について

開催校は「大東文化大学」。  
シンポジウムのテーマは「国際理解教育の推進と比較文化」。

#### 3 「会長奨励賞」について（予告）

次回大会では、第二回目の会長奨励賞の受賞者が発表されます。受賞者は各支部から推薦された会員の中から決定されます。

#### 4 支部・研究部会報告

- (1) 南東北支部事務局が引地研究室から左記へ移動しました。

千九六〇―一二九五 福島市光が丘一丁目 福島県立医科大学看護学部基礎部門（外国語） 亀田政則研究室  
電話&FAX  
〇二四一五四七―二三六五  
E-mail: albertm@cn.fmu.ac.jp

- (2) 社会言語学研究会では『比較文化研究』誌に「社会言語学特集号」を組む予定です。掲載希望の方はフロッピー（機種明記）を添付し、

原稿二部を左記に送って下さい。  
〒三三六〇九〇一 埼玉県浦和市領家六一―四一三一 栗原 優  
電話&FAX  
〇四八八二五―二七六六  
E-mail: kurihara@ic.daito.ac.jp

- (3) 広域アジア支部では「第三回アジア文化研究会」を十一月二十〜十一月二十二日の日程でクアラルンプールで開催致します。研究発表等に関する詳細は左記へお問い合わせ下さい。

〒八二一八五八― 福岡市東区箱崎六一―〇〇一 九州大学留学生センター 鹿島英一  
電話&FAX  
〇九二一六四二―二一四六  
E-mail: kashima@isc.kyushu.ac.jp

### 二 議題

#### 1 人事について

- (1) 役員改選（全役員留任となる）

会長 芳賀 肇  
副会長 西村清巳、石黒昭博、太田敬雄  
理事 薬原 靖、引地岳雄、島中康男、梅田和郎、鹿島英一、楠 純一、高橋八重子、斎藤和子、小林俊哉、釜池 進、山内信幸、進藤秀彦、南川啓一、市川邦康、飯島武久、早川正信、中澤紀美子、井上博嗣、鈴木瑠璃子

監事 町屋昌明、斧田好雄  
本部事務局長 佐藤幸正  
本部事務局次長 佐藤憲和

- (2) 理事の追加  
鈴木瑠璃子（東北学院大学）を理事に追加。
- (3) 監事の交代  
宇野秀夫に代わり斧田好雄（弘前大学）が就任。
- (4) 顧問の交代  
緒方純雄に代わり小倉讓二（新潟学関女子短大）が就任。

#### 2 「比較文化研究」編集について

- (1) 特別会計の収支報告
- (2) 編集補助費の増額
- (3) レフリー制の導入について  
この問題について提案が有り、今後検討することになった。

#### 3 第二十三回大会について

開催校については南東北支部が主管シンポジウムのテーマは次回大会時に提案。

#### 4 会費納入促進と会員名簿について

- (1) 五カ年に渡る会費未納者の取り扱いについて  
一九九四年度から一九九八年度に渡って一度も会費を納入しなかった会員は、所属支部と相談の上、特別理由の無い限り、会員権を失うことになった。

#### (2) 会費納入方法

5 第三回アジア文化研究会（マレーシア、クアラルンプール）開催について

詳細は報告事項の「支部報告」欄をご覧ください。

#### 6 「広域アジア支部」承認について

これまでの「アジア文化研究会」から支部として承認された。学会

七番目の支部となる。  
7 会計報告  
別紙の通り、承認された。

### 《本部事務局だより》

1 入会希望者へ  
本学会に入会を希望する方は、本部事務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお送り致します。入会申込書は本部事務局および各支部に備えてあります。

2 論文掲載希望者へ  
学会誌『比較文化研究』は年に四回発行しております。掲載を御希望の方は左記へお問い合わせ下さい。  
(三月末日〆切)  
千八五四〇〇八一 諫早市栄田町一〇五七 長崎ウエスレヤン短大南川研究室 日本比較文化学会九州支部  
電話 〇九五七二二六一二三四  
(五月末日〆切)  
千三七〇〇〇六八 高崎市昭和町53 新島学園女子短大内 日本比較文化学会関東支部  
電話 〇二七三二二六一一五五  
(九月末日〆切)  
千九六〇一二四七 福島市光が丘一 福島県立医科大学 看護学部基礎部門  
亀田政則研究室  
電話 〇二四一五四七二二三六五  
(十二月末日〆切)  
千六〇二一〇〇三三 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学文学部石黒研究室内 日本比較文化学会関西支部

電話 〇七五一二五一一四〇二六  
3 学会誌『比較文化会報』に近況報告、支部活動報告、研究部会報告、新刊紹介等で投稿なさる方は、左記の要領で応募下さい。  
(1) 近況報告  
縦書 十八字×七行  
(2) 新刊書、編注書等の紹介  
近況報告の場合と同じ  
(3) エッセイ投稿  
縦書 十八字×三十行  
(4) 支部報告、研究部会報告  
縦書 十八字×六十行  
投稿〆切日 毎年七月三十一日  
投稿先 千九六〇一二四七 福島市光が丘一番地 福島県立医科大学 数学学講座 楠 純一

### 第二十二回大会案内

時 二〇〇〇年六月十日(出)  
開催校 東北学院大学(泉キャンパス)  
問合先 千三七九一〇二二四 安中市寛宮三四一三三 比較文化研究室内 JACC 関東支部事務局 太田敏雄  
電話 〇二七三三八二二二一七  
FAX 〇二七三三八二二六三九三  
E-mail: tota@mail.wind.ne.jp

研究発表希望者へ  
1 レジューメをワープロなどで、B5版横書一枚にまとめてください。その際、左右の余白を二センチほど残してください。  
2 二〇〇〇年一月三十一日必着で上記太田敏雄宛に郵便かEメールで送っ

て下さい。  
シンポジウム講師の推薦  
第二十二回大会のシンポジウムテーマは「国際教育理解の推進と比較文化」です。各支部は十月三十一日までに講師を御推薦下さい。推薦された講師は上記研究発表1および2の要領で、レジューメを太田敏雄へお送りください。

### 会員新刊紹介

松方由美子『コンラッドの小説における女性像』近代文芸社(一九九九年五月)  
棟方久男『イペリアの遠い灯』雑考と随想他』青森大学出版局(一九九八年十月)  
古河美紀子『オペロンとマップ』ロバート・ヘリックの妖精詩とその思想的背景』植月恵一郎編『男と女のデイスケール』金星堂(一九九八年十二月)  
太田敏雄編、太田俊雄著『父との「新しき出会い」』開文社(一九九九年三月)  
受贈図書  
(一九九八年四月)一九九九年三月  
『日本教科教育学会誌』第二十一巻第一号(一九九八年四月)、第二号(一九九八年九月)、第三号(一九九八年十二月)、第四号(一九九九年三月)、『比較文化研究』創刊号(一九九九年三月)

International Journal of Curriculum Development and Practice 11 (1999)

### 《会長室だより》

会長 芳賀 馨

平成十一年九月十四日付で、日本比較文化学会は日本学術会議会長から第十八期登録学術研究団体として認定された旨の通知を受け取った。一期三年であるが本学会は十五期から連続四期認定されたことになる。関連研究連絡委員会は毎期文化人類学・民俗学と語学・文学であり、学術研究従事者としての構成員数(所謂研究者数)は四一五名である。本学会は今後とも全国大会開催、研究誌発行などの学会活動を堅実にすすめていきたい。  
近年学術会議主催でアジア学術会議が開催されている。本学会も後援団体の一つとして参加している。今年のテーマは人口と環境であるが、先日一八八頁の報告書が送られてきた。報告書を読みたい人は私まで申し出て下さい。  
第二十二回全国大会は関東支部主管であるが都合によって会場は東北学院大学教養学部(泉キャンパス)に変更して頂いた。二〇〇〇年は私の東北学院大学勤務の最後の年であるので記念の大会となる。従って今回の研究発表申込みは、二〇〇〇年一月末日までに関東支部長・太田敏雄氏自宅(千三七九一〇二二四)安中市寛宮三四一三三)宛に送って頂きたい。

### 《支部からの報告》

北東北支部報告  
九・三十 ヴィオレッタ・シンヤと日本  
三・十 『イペリアの遠い灯』を巡って  
関西支部活動報告  
棟方 久男

七・四

「日英語における Devised Self—認知言語学的考察—」  
Mediating Misogyny: The man of Law's Tale and the Clerk's Tale 岡本由紀子  
色子(5) Part X

十一・二

指示と照応に関する認知的考察—Point of View Effect & Subjectification—  
釜池 進

長谷部陽一郎

The Hundred Secret Senses  
における物語の復権—アイニ  
ンテイテイの解体と再生—  
佐保 直美

EFB—English as a Foreign  
Body  
Shaun Gates

十二・二六

場所格の機能 金志佳代子  
The Confidence-Man におけ  
る演劇性—仮面舞踏会的舞台  
空間としての世界—  
松本加奈子

フィールデングの『ジョナソ  
ン・ワイルド伝』を巡って  
能口 盾彦

一・十六

George Mackay Brown が描  
く魔女裁判 木戸 敦子  
障子と襖とインターネット  
沼波 義彦

三・十三

近代主義と元型—比較文化研  
究の可能性 佐々木 隆  
Corporate Citizenship: 社会  
貢献を率先し始めた企業  
加藤 靖弘

ステンシルの探究と今世紀最  
大の陰謀 柏原 和子  
余は如何にして中世英文学者

となりしか 斎藤 勇

関西支部及び中国・四国支部合同活動報  
告  
十二・十二日・英語の論理と表現  
石黒 昭博

一九三五年、中国の通貨改革  
について 佐野健太郎  
マラッカ、シンガポールにお  
ける華人プランカンの服装の  
変遷 吉井 敬雄

W. M. Thackeray の The Vir  
ginians の一考察 島中 康男

広域アジア支部活動報告  
十・三一 国際比較文化学構築  
芳賀 馨

シルクロード・ウォーク—中  
国・ハミルバキスタン・フン  
ザ九六三キロ・ウォーク—  
町屋 昌明

渡来食品の今—灰汁(あく)  
ちまき 芳賀 文子  
コーパスから見たオーストラ  
リア英語の特性—アメリカ文  
化はオーストラリア英語に与  
えたか— 成沢 義雄

十九世紀末オーストラリアに  
おける社会主義と植民地ナシ  
ョナリズム—「労働者」編集  
者ウィリアム・レインの活動  
を中心に— 沢田 敬人

『百人一首』と翻訳—漢語訳  
を中心に— 佐藤 和憲  
国際化の中の俳句—木下夕爾  
の俳句を考える— 佐藤 智年

相互のイメージとスレーシン

ガボールと日本—  
鹿島 英一

ニュージラントと日本の学  
校文化の比較—我が子をニ  
ュージラント、チャートウ  
エルのジョイント・ベンチ  
ャー・スクールへ入学させた  
体験より— 上原 映子

教育問題と仏教思想  
鈴木美恵子

九州支部活動報告  
五月九日 支部研究会  
講演 翻案と著作権  
大家 重夫

中国語の教授法について—教  
育中の諸問題— 劉 丹  
韓日ことわざの比較研究 動  
物のことわざの中の「虎」を  
巡って— 朴 丹香

狂言にあらわれた妻たち  
甘熙 栄

日本の対アフリカ教育文化開  
発支援政策—セネガル共和国  
を中心として— 鈴井 宣行

青少年健全育成条例による規  
制と青少年の実態—福岡県を  
事例として— 野田寿美子

スタインベック世界の「底」  
大木 正明

What Maisie Knew メイジー  
の担う役割と「家族」  
八尋真由美

アメリカのプライベートル  
ブにおける差別問題  
青木 隆徳

CMに観るアメリカ人  
カ「放送広告」における訴

求形態の特徴について  
吉村 宗司

Jerzy Kosinski と映画 Being  
There について 中谷 安男

南東北支部活動報告  
七・十八 包括系言語(Inclusive / who-  
listic language)の可能性  
亀田 政則

版画家 斎藤 清

九・十九 日本における新しいシエイク  
スピアへの試み—「十二夜」  
を演出する— 下館 和巳

十・二四 スコットランドの旅から—詩  
人バーンズとハギス—  
近藤 哲

スリランカの文化と日本の文  
化—子供のいじめ問題と家族  
のあり方—  
スサンタ・ヘーラット

十一・二八 この一年を振り返って  
三・十三 看護哲学—看護の日常的理  
解から— 松尾あや子

生と死の間をめぐる諸問題  
森 一

### 《編集後記》

今回は、記事がいつもと較べて多くな  
りました。茶論はお休みです。  
原稿をお送り下さいました先生方、有  
難うございました。

(楠 純一)